

平成3年9月30日（月）第5校時

板野中学校3年E組

男子19名 女子18名 計37名

指導者 阿部 憲 作

1. 主 題 誇りうる生き方を求めて

資 料 「姉ちゃん おめでとう！」（生徒作文）

2. 主題設定の理由

昨年版野中学校に赴任し、どれだけ被差別の立場に立つて部落問題を語るか、生徒と共に歩めるかが問われているんだという思いでいっぱいであった。しかし、「被差別の立場に立ちきる」という言葉は、頭では理解できていても、私の心は生徒たちを前にして揺れ動いていた。部落問題を語っている時、食い入るように目を輝かせる生徒がいれば、うつむいてしまう生徒がいる。うつむいてしまう生徒に「私が助けてやろう」という生徒たちよりも一段上の立場から救いをさしのべようとする傲慢さがあった。また、生徒を前にして私自身の差別の歴史を語る時に、言葉を選んで語ろうとする意識、同情心に揺れていたと反省する。それはK子の生活ノートに「はつきり言って先生も私は疑っている。口先だけって感じがしたからだ。きれいごとなんかいらないから自分の本当に思っている言葉を私たちに聞かせて欲しい。」と訴えたことから明らかである。生徒たちはまさに教師の生き方を厳しく見つめている。それは、生徒によって私たち教師が人間としてどう生きるのかを教えてくれたことであり、また、生徒たちに励まされて生きてきたと言える。

今年3年生E組を担当することになった時、生徒たちを通して学んだことをエネルギーにし、「丸岡忠雄さんの言葉にある『お前だったら、俺の一番底にある部分が全部さらけ出せる』そんな信頼の絆で結ばれた学級の仲間でありたい、人間でありたい。」と語り、最終学年のスタートをきった。

本学級には、体育館で行われた全体学習で「自分は部落出身です」とはつきり部落宣言をしたB子がいる。授業後のB子の感想文には「これでスッキリしました。もう何も隠すことはありません。あとはもうれつに差別に立ち向かっていくだけです。・・・C君も部落出身であることを打ち明けました。私はあんな勇気のある友だちがいてとても幸せです。・・・これからどんな差別が待ち構えているかわかりません。でも、C君やまわりの人たちと一緒に差別に負けずにがんばっていきたいです。」と書いてきた。部落差別と闘い必死に生きている生徒たちを前にして、私はこの生徒たちを決して悲しませてはならないと心に誓った。学級の生徒たちも「BさんやC君は自分が部落出身だと言ったのは、ぼくたちを信頼してい

ることだから、ぼくたちもその気持ちにこたえてがんばっていかなくてはいけないと思います。」と応え、生徒たちが仲間として部落問題に真剣に取り組むきっかけとなった。

6月、丸岡忠雄さんの『同和教育への希い』の学習を通して、「ふるさと」を「かくす」ことから「なめる」ことへと自己を変革させた丸岡忠雄さんの誇りうる生き方に学んだ。丸岡さんの強さ・やさしさは、生徒たちに誇らしく生きる輝きを与えた。「私には自分が部落出身と言う勇気がありません。そのことを言ってしまうと周りのみんなから差別されるんじゃないかなって思ってしまうんです。」と語っていたD子は「私は今まで揺れ動いていました。部落という言葉が重くのしかかっていました。でも、丸岡さんの生き方を学んで勇気が出てきました。私も丸岡さんのように堂々と部落差別と闘って生きていこうと思います。」と学級で語り、また、「ぼくの母は、今でも自分が部落出身ということと言えないと言っています。ぼくの優しい母を苦しめる部落差別に、とても腹が立ちます。ぼくの親たちを苦しめ、そして今もぼくたちを苦しめようとしている部落差別を絶対許しません。」とE男が力強く語った。「同じ仲間として一緒にがんばっていこうな。」と手を取り合い、部落差別と共に闘っていこうとするすばらしい生徒たちを前にして、私は幸せに思う。しかし、「ぼくにはそんなに強くなれない。でも自分の気も苦しいし、どうしていいかわからない。」と訴える生徒たちもいる。まだまだ苦しんでいる生徒たちがいる。この生徒たちの苦しみは、私たち一人ひとりの苦しみであり、まさに部落差別は人間の悲しみである。

本資料「姉ちゃん おめでとう！」は、板野郡同和問題意見発表会で部落差別の本質の一つである姉の結婚の問題にかかわった生徒の意見発表である。世界に一つしかない人間の生命と生命が、固い愛の絆で結ばれる結婚。それは、長い人生の中で最も祝福されるものであると同時に、育まれ大切にされなければならない人間誰もが持つべき当然の権利である。その権利が部落差別によって奪われてきた事実、奪われようとしている事実に対して、わたしたちは激しい怒りと人間の悲しさを痛恨する。

本資料では、部落の青年と恋愛し、結婚しようとする姉と共に、はじめは結婚に反対していた家族と闘い、部落差別と闘って生きるK子のすばらしい生き方に貫かれていることがわかる。K子を支えていたものは演劇「海が泣くとき」を演じていたことにより、部落差別を絶対に許さないという真実を貫く強い生き方に支えられていたことである。真実を貫く姉とK子の生き方に、私は部落差別を乗り越えて生きる人間のたくましさと誇りを教えられる。また、部落差別は差別する側に立つ人間が変わらなければならないという真実と同時に、すべての人間の悲しみであることを教えられる。

私たちは、本資料の中にもあるように部落差別の厳しさを痛感する。そして今、やがて本校から巣立ち行く生徒たちを前にしたとき、一人ひとりの生徒たちの幸せを願わずにはいられない。私たち一人ひとりには部落問題にかかわって生きている。部落問題の解決をなくしては、私たち一人ひとりの幸せなどありえない。「これから先、私は、私の大好きなお姉さん

と共に、部落差別を背負い、まっすぐに胸張って生きていきます。それが本当の人間の人間らしい生き方だと思うからです。」と力強く語ったK子の言葉は、そのまま「部落の友と共に、部落差別を背負い、まっすぐに胸張って生きていきます。」そして、「私たちは仲間と共に、部落差別と闘って胸張って生きていきます。」と語ることを願うわたしたちの願いである。生徒たち一人ひとりに、人間として部落差別と闘って生きる誇らしい生き方をして欲しいと願い、本主題を設定した。

3. ね ら い

部落問題の解決は、すべての人間の幸福であることを理解させるとともに、姉やK子の生き方を通して、部落差別と闘い、真実を貫いて生きる人間として誇りうる生き方に共感させ、部落差別と闘って生きていこうとする態度と実践力を育てる。

4. 視 点 人権と差別

5. 指導計画

- (1) 常時指導 学級目標「熱と光と」を合言葉に、人間として熱く生きる、学級の一人ひとりが輝いている、人間が尊重されることが、学級の思想となるよう、語りかけ、対話をし、互いに高め合う学級集団を作る。

- (2) 関連的指導 道徳 「ナイン」
裏切られてもどんなに傷つけられても、決して屈せずにひたむきに生きていく英夫の生き方を通して、人間を信じ続けて生きることのすることのすばらしさや人間のもつ尊さを理解させる。

- (3) 核心的指導 第一次 「姉ちゃん おめでとう！」・・・2時間(本時2/2)
第二次 「水平社宣言讃歌」・・・2時間
第三次 「水平社宣言」・・・4時間(本誌2/2)

(4) 発展としての関連指導

学級活動 「部落問題にかかわる自分の生き方を語り合う」

これまでの部落問題学習を通して、部落の人たちのすばらしい生き方から何を学んだか、自分は部落問題とかかわってどう生きるのかを語り合う。さらに部落問題の解決に向けて自分は何をすべきかを考え、実践する態度を養いたい。

(5) 常時指導(発展)

部落問題を自分の問題としてとらえ、部落問題学習を通して自分を高めていく態度を身につけさせたい。さらに家庭・地域社会において部落

問題の解決に取り組む実践力まで高めたい。

6. 本時の指導

(1) 目 標

部落差別と闘って生きる姉とK子の誇りうる生き方に共感させるとともに、部落差別はすべての人間の悲しみであることを理解させ、部落差別と闘って生きる生き方を育てる。

(2) 展 開

学 習 活 動	主な発問と期待される生徒の反応	指導上場の留意点
○ 資料を読む。 1. 「姉ちゃんおめでとう！」を読んだ感想を発表する。	○ この発表を聞いて、どんなことを感じたか。 ・結婚を反対した家族に腹が立つ ・K子さんは強い人だ。 ・姉さんが結婚できてよかった。 ・厳しい部落差別の現実がある。	・資料全体の内容をよく理解させる。
2. 家族が反対した部落差別について考える。	○ 家族が反対したことについてどう思うか。 ・愛し合った二人を引き離す権利など誰にもない。 ・本人と会いもしないで反対するのはまちがっている。 ・家族の人たちが言っていることは大変な誤りだ。 ・部落差別がみんなを苦しめている。	・家族の人たちの偏見に憤りを持たせるとともに、部落差別はすべての人間の悲しみであることを理解させる。
3. 家族の人たちを変えていったものは何か考え	○ 反対していた家族の人たちを変えたものは何だと思うか。 ・子どもたち二人の強い信念がわ	・真実を貫くたくましい生き方と、愛する子どもたちだから

る。	かったから。 ・ 真実を教えられ、自分たちの過ちに気付いたから。 ・ 愛する娘の本当の幸せに気付いたから。	こそ、部落差別と闘って生きることが人間の本当の幸せであることを理解させる
4. K子さんの生き方を支えていたものについて考える。	○ K子さんの生き方を支えていたものは何だと思うか。 ・ 愛する姉を悲しませたくない。 ・ 演劇を通して部落差別の真実を知った強さ。 ・ 必ず家族は本当のことをわかってくれるという信念。 ・ まちがったことを許さない人間の誇り。	・ 部落差別は、差別される側に責任があるのではなく、差別する側にその責任があるという真実と人間としての本当の生き方を貫こうとする人間の誇りがK子を支えていたことを理解させる。
5. 本当の人間の人間らしい生き方について考える。	○ 最後の2行に象徴されるK子さんの生き方についてどう思うか、また、自分はどのように生きて生きていきたいか。 ・ 正しいことを貫く、誇らしい生き方がしたい。 ・ 部落問題から逃げないで堂々と生きたい。 ・ 部落差別の悲しみを背負って生きたい。 ・ 仲間と共に部落差別と闘って生きていきたい。	・ 人間として悲しいことは、正しいことがわかっていて正しいことを貫けない弱さであり、そのことは人間性の喪失である。人間として生きる、真実を貫く誇らしい生き方をつかませたい。

姉ちゃん おめでとう！

あれは中学1年生の8月10日のことでした。市内で働いている姉が帰ってきて、久しぶりに家族そろって楽しく夕食をすませました。

その後、私の部屋で姉と二人で、学校のことや友達のことなどおしゃべりをしていました。夜もふけて周囲が寝静まったころ、突然ニコニコして話していた姉が、うつむきかげんで不安そうにこう言うんです。

「K子、姉ちゃん今な、交際しよる人がおるんやけど部落の人らしいんよ。1年半ぐらい交際しよんやけど、もう結婚しようと思うんよ……。」

「……………」

「ほなけど、おじいさん達が、たぶん反対する。どうしょう——。」

姉の眼には涙がたまっていました。

ちょうどその頃、私は演劇部で「海が泣くとき」の中島一子さんの役をしていました。

一子さんを苦しめる部落差別は大きいです。一子さんとの出あいが私にとって姉を支える大きな力となりました。

私は、

「ほら反対するかもしれん。けど、《絶対》部落の人を悪く言うのはまちがっている。たとえ、親であつても許せん。もし、姉ちゃんの結婚の話に反対するようなら、私も姉ちゃんと一緒になつて言つてあげる。『反対されたけん』やいうて、あきらめることはない。ついて行き！」
つて言うと、姉は、うなずいたまま、下を向いていました。

そんなことがあつてから、1年と3ヶ月が過ぎました。姉は、お母さんに、

「結婚したい人がおるんやけどな……。部落の人なんよ。」

と言うと、母は、

「フツウの人と結婚しなさい。」

の一言。お姉さんは、

「ふつうの人で……。仕事やってまじめやし、やさしい……。」

思いがいっぱいそれ以上言葉にはなりませんでした。

すると、

「まだ、おまはんやには、わからん。」

母は言うんです。父や祖父、祖母までもが、

「あかん。」

「この頃は、部落の人も、ふつうの人もわからんけど、昔は……。」

などと言うんです。

いつもはやさしいお母さん達の顔が鬼のように見えたのです。それでも私は姉と二人であ

きらめずに家族との話し合いを続けました。差別は差別される側に問題があるのではなく、差別する側にその責任があるのだ。苦しみの中を生きてきた人の中にこそ、人間としての本当の優しさがあるんだ、ということ。

そんな日が1ヶ月ぐらい続いたあと、やつとお姉さん達二人にとっても、私にとっても本当にうれしい日がきたのです。

それは12月20日でした。おじいさんが、「もう好きどうしが、いっしょになるんやけん、なんも言わん。がんばり。」

お母さんも、

「これから苦しいこともあるけど、二人で力を合わせてやっていけるな。」

と、励ますように言ってくれました。

今年、1月に結婚式を挙げた姉のお腹の中には、いまではもう赤ちゃんがいるんです。そんな姉を気付かつて、やさしく、身の回りの世話をやいたり、炊事の手伝いをしたりしているお兄さんの姿を見て、

「お姉ちゃん幸せだなあ！」

とうれしくなります。

これから先、私は、私の大好きなお姉さんと共に、部落差別を背負い、まっすぐに胸はって生きていきます。それが本当の人間の人間らしい生き方だと思うからです。

